

平成 22 年度 研究実施計画書

研究種別	重点推進研究	研究班	発達・情緒班
研究課題名	発達障害のある子どもへの学校教育における支援の在り方に関する実際的研究 －幼児教育から後期中等教育への支援の連続性－		
研究期間	平成 22 年度 ～ 23 年度		
研究組織	氏 名	所属・職名	役 割
研究代表者	笹森 洋樹	発達障害教育情報センター・総括研究員	研究の総括
研究分担者	梅田 真理	発達障害教育情報センター・総括研究員	副代表
	大城 政之	発達障害教育情報センター・主任研究員	調査・データ収集・整理 まとめ 等
	海津亜希子	発達障害教育情報センター・主任研究員	
	廣瀬由美子	発達障害教育情報センター・総括研究員	
	藤井 茂樹	発達障害教育情報センター・総括研究員	
	渥美 義賢	発達障害教育情報センター長	
	伊藤 由美	発達障害教育情報センター・研究員	
	柘植 雅義	企画部・上席総括研究員	
	小松 幸恵	企画部・総括研究員	
	久保山茂樹	企画部・主任研究員	
	玉木 宗久	教育支援部・主任研究員	
	涌井 恵	教育支援部・研究員	
	小林 倫代	教育研修情報部・総括研究員	

研究協力者	氏 名	所属機関・職名	役 割
		※ 調整中	

研究協力機関	機 関 名	役 割
	※ 調整中	

(趣旨及び目的)

発達障害の障害特性は生涯にわたりその基本的な症状は持ち続けることが特徴である。幼児期から学童期、思春期・青年期そして成人期と年齢段階によりその状態像は変容していく。学校教育においては、幼児教育から高等教育まで教育環境が違い、求められる適応能力についても大きく異なってくる。教育的支援の在り方については、その年齢や発達段階に応じて長期的、縦断的な展望を持ち、支援の連続性を視野に入れて考えていく必要がある。

小学校、中学校の義務教育段階では各自治体の研究指定校などを中心に、授業改善や学級経営の工夫、多様な教育形態の運用、支援員や通級の活用、個別の教育支援計画の作成等、先進的な取組の実践例が報告されてきている。

確定診断の難しい幼児期においては、幼児個人に対する支援が中心になること、何らかの発達上の困難に気づいていても特別な支援にはつながらないこと、保護者と共通理解の上で進めにくいこと等が課題として挙げられる。地域によっては、通級や特別支援教室のような取り組みが行われていたり、小学校への支援の引き継ぎを上手に工夫したりしているところもある。

高等学校については、文部科学省の発達障害支援モデル事業において、モデル校による実践が行われており、また、特別支援教育の推進に関する協力者会議の高等学校WGの報告が出されている。学科や課程別の違い、入試制度、特別の教育課程の編成、そして就労支援など障害児の教育という土壌のないところでどう教師の意識改革を行い、特別支援教育を進めていくかが課題となっている。

本研究では、これらの幼稚園や学校での実践や海外の取組も含めた関連する先行研究等についてその教育的効果について考察し、義務教育段階における教育的支援を中心に、幼児教育から後期中等教育への支援の連続性に焦点をあてていく。縦軸に長期的、縦断的な視点から、横軸には、年齢段階に応じた指導方法や教育環境、人的配置、教育形態の工夫なども考慮に入れ、気づきから支援に至る効果的なモデルを検討し、教育現場に提案することを目的とする。

平成20～21年度の小・中学校における教科教育の支援の研究では、多くの教員が外部の専門家から指導・助言を受ける機会は少ないことから、学年体制やコーディネーター等の校内支援により、日常の授業や学級経営の中で取り組める支援を考えることを研究の目的として、教師自身がチェック、アセスメントを行い、負担感なく具体的な支援につなげることができる支援ツール（以下学級サポートプラン）を検討、作成した。通常の学級において個別的な支援を行うためには、学級全体が落ち着いて学習に取り組める環境が重要である。学級全体へのわかりやすい支援が個別的な支援にもつながっていくとの仮説のもと、授業改善、学級経営の視点で研究をまとめた。研究をまとめるにあたり、アセスメントをどう具体的な支援に活かしていくか、支援による効果をどう評価していくかが大きな課題として残された。研究協力校では、わかりやすい授業の工夫により、学級全体の子どもたちの授業への参加態度などに変容が見られたが、こうした教育的な効果は目に見えにくい面がある。学級サポートプランの有効性は、教育的な効果に表れることが前提になくは意味がない。学級全体へのわかりやすい授業の改善、学級経営の見直し、発達障害のある子どもたちにとっても教育的な効果があり、学級全体の学力向上にもつながっているというような評価の指標を検討していく必要がある。

本研究では、小学校、中学校の研究協力により作成した学級サポートプランの検証及び、幼稚園、高等学校における適用等を通して、教育的効果、評価の指標等について検討し、幼稚園、小学校、中学校、高等学校に至る支援の連続性という視点でまとめていきたい。研究成果は、発達障害についての早期からの一貫した教育的支援の課題解決に寄与できるものと考えている。

(期待される成果と普及方法)

平成22年度 小学校、中学校の通常の学級における支援ツールの検討と検証
幼稚園等、高等学校における発達障害のある子どもへの教育的支援の在り方
→中間まとめの作成、学会発表、教育現場への普及・活用

平成23年度 幼稚園、高等学校への支援ツールの適用と幼稚園、高等学校で必要とされるツールの検討
支援の一貫性、連続性に関するまとめ（含 効果的な個別の教育支援計画の在り方など）
→研究報告書の作成、Web公開、教育現場への普及・活用、学会発表

(平成24年度以降) ガイドブック（事例集）の作成

(研究計画・方法)

(要旨)

第一年次は、

・先行研究において小学校、中学校の研究協力により作成した学級サポートプランの検証を行うと共に、教育的評価の指標も含めた支援ツールについて検討する。

・幼稚園、高等学校について、文献や先進事例から教育的支援の在り方について検討する。

第二年次は、

・幼稚園から高等学校に至る支援ツールの検証、支援モデルを提案するとともに、支援の一貫性、連続性の視点から支援をつなぐ効果的な方法等（個別の教育支援計画等）について提言する。

(平成22年度)

年月	研究活動	備考
H22.4～6	・発達障害のある子どもの状態像の経年的変化と年齢段階における教育的支援の在り方についての検討	定例会議 (月1回)
6～9	・先進的な取組をしている幼、小、中、高の調査、資料収集 ・小学校、中学校の協力校における学級サポートプランの検証 ・幼稚園、高等学校等における発達障害のある幼児生徒への教育的支援に関する現状把握	定例会議 (月1回) 研究協議会
10～12	・小学校、中学校の協力校における学級サポートプランの検証 ・教育的評価の指標の検討と支援ツールの作成に向けての検討 ・幼稚園、高等学校の教育的支援の在り方についての整理	定例会議 (月1回) 研究協議会
H23.1～3	・教育的評価の指標も含めた支援ツールの検討・作成 ・幼稚園、高等学校の実態に応じた教育的支援のためのツール等の検討	定例会議 (月1回) 研究協議会

(平成23年度)

年月	研究活動	備考
H23.4～6	・教育的評価の指標も含めた支援ツールの検討・作成 ・幼稚園、小学校、中学校、高等学校の協力校による検証	定例会議 研究協議会
.6～12	・教育的評価の指標も含めた支援ツールの検討・作成 ・幼稚園、小学校、中学校、高等学校の協力校による検証	定例会議 研究協議会
H24.1～3	・支援の連続性の視点から研究のまとめ	定例会議 研究協議会

平成22年度において調査を行う場合

調査1：調査名（幼稚園、小学校、中学校、高等学校における発達障害のある幼児児童生徒の支援の実際）

①調査の目的（何を明らかにするのか）

・発達障害のある幼児児童生徒への支援の先進的な取り組みについての情報収集

②調査の対象 ・教育委員会の推薦校（研究指定校など）

③調査の時期 ・6～9月

④調査の方法 ・実地調査（必要に応じて質問紙調査）

平成22年度研究協議会等

〈予定回数 3回〉〈予定時期 7月・11月・3月〉〈場所 未定 〉

研究
パート
ナー
の
条
件

通常の学級における発達障害のある子どもの支援について、学級づくり、授業づくり等の視点から研究を進めている教育委員会、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、研究機関等。